語源について　　第９回

前回に続き生活のなかに密着した言葉を中心に、言葉の知識を豊かにする。
“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。

・青天の霹靂ﾍｷﾚｷ：突然に起こった大事件。「彼の死は青天の霹靂だった」「事件が起こっても、必ずしも青天の霹靂とは言い得ない状態であった」などと言う。「霹靂」は急に雷が激しくなること。「疾雷」のこと。また、大きな音をも指す。「青天の霹靂」は青く晴れた空に突然雷が鳴りひびくことである。
・観念する：これまでとあきらめる。　覚悟する。「もはやこれまでと観念する」「のがれる道はない。さあ観念しろ」などと使う。「観念のほぞを固める」というのも、これまでと覚悟する意である。
・いがみあう：人が互いに争う。けんかする。「あの二人は何かと言うとすぐいがみあう」。また「親子のいがみあい」のように名詞としても使う。
「いがむ」は、もと、けものが歯をむき出してかみつこうとすること。
・両　天秤をかける：ふたまたをかける。物事がどちらにころんでも損のないように、ふたまたをかけること。一方が駄目でも一方はうまくいくようにしておくこと。普通「王手飛車取りの両天秤をかける」「両天秤をかけてもそううまく行かないよ」などと言う。本来、「両天秤」は、物の重さをはかる天秤のことだが、両方の端に物をかけるところからこの名称が生まれたのであろう。
・つるべおとし：急速に落ちること。縄や竿で井戸の水をくみあげるつるべを井戸の中に落とすように、まっすぐに早く落ちること。ことに、秋の日の暮れやすいことを形容するのに使う。すなわち、「秋の日はつるべおとし」と言う。なお「つるべ」は「つる(釣)」に「へ(瓶)」の付いたものである。
・露払：先頭に立って導く人。「私が露払をしますよ」などと言う。先頭に立って野道などを行く場合には、草の露を払いおとしながら進むからであろう。
相撲で、横綱の土俵入りの時、先に立って土俵に上がる力士を「露払」と言う。また、転じて、遊芸で最初に演ずること、あるいは、ある物事に先立っていることを「つゆはらい」とも称する。
初場所の優勝により稀勢の里が久々の日本出身横綱となる。来場所土俵入りには露払い・横綱・太刀持ちの順に入場がみられることだろう。
・千秋楽：興業の最後の日のこと。「いよいよ明日で千秋楽だ」「千秋楽を迎える」などと言う。「千秋楽」(千歳楽ｾﾝｻﾞｲﾗｸとも言う)は元来、雅楽の曲の一つであって、法会ﾎｳｴでは、最後に「千秋楽」を奏する習慣があった。そこで、「千秋楽」に最後の意を生じ、芝居や相撲で興業期日の最後を言うようになったと言わ

れる。なお、「千秋楽」を略して、単に「楽」とも言う。「明日はいよいよ楽だ」

・つぶしがきく：ほかの方面にも使いみちがある。ある地位から離れても、他の仕事につくことが出来る。「彼は定年でやめてもつぶしがきくからいいよ」「偏屈な男で、つぶしがきかないから困る」などと使う。もと、金・銀・銅のような金属製品は、溶かして地金にして再び他のものをつくるのに使えるからである。

・水際だつ：あざやかでりっぱに見える。目立ってりっぱに見えること。「水際」は、陸地が海や川などの水と接するところであるから、他との区別がはっきりしていてあざやかに見えるからであろう。「水際だった腕前を見せる」「水際だった作戦」などと言う。古くは「水際が立つ」または「水際を立てる」という表現があったようだ。

・どぎもを抜く：非常にびっくりさせる。きもをつぶさせる。「どぎも」は「きも（肝、胆）」に接続語「ど」の付いた語である。「ど」は「どぎつい」「ど畜生」などのように強めて言うのに使う。「ひどく大がかりなので、すっかりどぎもを抜かれた」「どぎもを抜かれてぽかんとする」などと使う。「度肝」と書かれることが多い。なお、「きもを抜かれる」という言葉もある。

・雨後のたけのこ：続々と発生すること。春先の雨あがりの後に、たけのこが続々と頭を出すことから。「小さい店が雨後のたけのこのように現れた」

・おめがねにかなう：目上に認められる。気に入られる。「おめがねにかなって昇進した」「おめがねにかなって婿となる」などと言う。「めがね」は、もちろんレンズを利用して視力を補うものだが、「めがねちがい」「めがねがくるう」のように、物を見わける目、目ききの意に使う。「おめがねにかなう」は祖の意の「めがね」で、それに敬語の接頭語「お」の付いた形である。

・たががゆるむ：おいぼれてにぶくなる。「彼も大分たががゆるんで来たようだ」などと使う。もと、桶を締めている竹の「たが」がしっかりとしなくなることである。また、緊張がゆるんでしまりがなくなるような場合にもつかうようである。

・長丁場：物事が長く続くところ。宿場と宿場との間が「丁場」で、その距離の長いのが「長丁場」である。転じて、時間が長くかかって骨の折れるような場合に「長丁場」と言う。「いよいよこの仕事も長丁場にかかる」「やっと長丁場を乗り越えた」

地元の魅力を拾い出すなど、この作業は長丁場になりそうだ。

“語源のたのしみ” 岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。　（池田）